

令和 5 年 4 月 25 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18475

研究課題名（和文）東欧移民芸術家の戦時下のアメリカ社会におけるデザイン活動

研究課題名（英文）Design Activities of Eastern European Immigrant Artist in Wartime U.S.

研究代表者

井口 壽乃（IGUCHI, Toshino）

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：00305814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究において、移民の文化的視点から東欧移民芸術家が社会システムの異なるアメリカ社会で摩擦と軋轢を伴いつつ、いかに活動を展開したかを実証した。デザイン活動の一つの拠点であったシカゴのニュー・バウハウスを中心にラスロー・モホイ＝ナジ、ジェルジ・ケペシュ、ネイサン・ラーナーの戦時中に考案されたデザインと教育方法について、ウィル・バーティンが空軍とアメリカ情報局のために行なったデザインについて検討した。彼らのデザイン活動は戦後のアメリカのデザインの基盤を形成した。戦後から冷戦期にかけての科学技術に基づく芸術へと発展する過程には、アメリカ政府の圧力と産業界からの要求が関連していることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、戦後アメリカにおける現代デザインの基礎が東欧移民芸術家によるヨーロッパのモダンアート思想を通じてもたらされたことを実証した。L.モホイ＝ナジ著『ヴィジョン・イン・モーション』を翻訳出版を通じて、ニュー・バウハウスにおけるデザイン教育と活動の再検討を行なった。ジェルジ・ケペシュの科学的デザイン理論の再検討およびウィル・バーティンのデザインの考察により、冷戦時代の資本主義イデオロギーを科学と結びつけたアメリカの国家戦略と関連している点を指摘した。さらにネイサン・ラーナーの未公開作品の公開と研究書の出版を行い、ラーナーに対する新たな評価を提示し、研究を社会へ還元した意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In this study, I provide a cultural-historical perspective on immigration to demonstrate how Eastern European immigrant artists developed their activities with friction and conflict in American society, which had a different social system. The study examined the wartime designs and educational methods of L.Moholy-Nagy, Gyorgy Kepes, and Nathan Lerner at the New Bauhaus in Chicago, one of the centers of design activity, and Will Bertin's designs for the Air Force and the USIA. Their design work formed the foundation of postwar American design. The development of the postwar and Cold War period into an art based on science and technology was found to be related to pressure from the U.S. government and demands from industry.

研究分野：芸術論、デザイン史

キーワード：ニュー・バウハウス 東欧移民 科学技術 メディアアート 戦時下 ラスロー・モホイ＝ナジ ジェルジ・ケペシュ ネイサン・ラーナー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の研究において、第2次世界大戦後のアメリカの美術、建築、デザイン、音楽などの芸術領域でヨーロッパ移民芸術家が貢献したことは明らかにされている。しかし、戦時中は東欧出身の移民芸術家はマイノリティとして扱われ、差別や偏見の対象として扱われた可能性がある。

(2) シカゴ芸術産業協会がヨーロッパのモダンデザインをアメリカに導入すべく、ニュー・バウハウスを開校した際にハンガリー人のラースロー・モホイ＝ナジが学長に、ジェルジ・ケペシュとウクライナ人のアルキペンコが教師として招聘されたが、利潤を追求する芸術産業協会によってニュー・バウハウスは1年で閉校した。閉校の原因にはヨーロッパ的な芸術理念とアメリカ産業界の功利主義的学校運営の違いが大きく関係していると考えられるが、その詳細については明らかにされていない。

(3) 戦時下で移民芸術家は米軍のためのデザインやアメリカ政府のプロパガンダ政策に携わるが、その実態は明らかにされてこなかった。

上記の課題から、従来のデザイン史研究では解明されていない移民芸術家の戦時下のアメリカにおける活動に注目し、モダンデザインの越境と文化的摩擦によるハイブリッド化の諸問題を実証的かつ歴史的に解明する必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカにおける東欧移民芸術家に焦点をあて、異文化が会合する際の摩擦と軋轢を実証的に検証し、モダンデザインの思想と手法がヨーロッパからアメリカへもたらされた「モダンデザインの越境」を再検討することにある。その際、戦時から戦後にかけての国家的戦略との関係を解明する。

### 3. 研究の方法

研究方法は、(1) 未公開資料の調査と遺族へのインタビュー (2) 資料/作品の分析と考察 (3) 研究成果公表のための学会発表、論文執筆・出版および展覧会開催の3つを柱に研究を進めた。2020年度以降はコロナ感染拡大を受け、研究期間の2年延期、調査計画の変更と修正を行なった。

調査先と内容は以下の通りである。

シカゴのニュー・バウハウスと後継のスクール・オブ・デザインとインスティテュート・オブ・デザインの芸術家ラースロー・モホイ＝ナジ、ジェルジ・ケペシュ、ネイサン・ラー

ナーの戦時下のデザイン教育と活動記録に関する資料調査を、スミソニアン研究所とシカゴ歴史博物館アーカイヴおよびエゲルのケペシュ研究所（ハンガリー）にて、ネイサン・ラーナーに関する聞き取り調査をラーナー夫人へのインタビューとして実施した。

ドイツ人デザイナーのウィル・パーチンが手がけたとされる空軍のためのデザインおよび米国情報局（USIA）のプロパガンダのデザインについて、ロチェスター工科大学図書館アーカイヴにて実施した。

#### 4．研究成果

##### （１）ニュー・バウハウスのデザイン思想と戦時下の活動についての再検討

戦時中ニュー・バウハウスにおける新たな教育プログラムであるジェルジ・ケペシュによる科学的視覚理論に基づく「カムフラージュ・コース」、そしてL. モホイ＝ナジによる退役軍人と身体障害者のための「オキュペイショナル・セラピー・コース」について、それぞれの教育内容およびシカゴ市民間防衛局との関係を明らかにした。カムフラージュの研究を通じて獲得されたケペシュの科学的視覚理論は、後のMITにおける「The New Landscape in Art and Science」展へと発展したことを実証した。（Toshino Iguchi, A Reconsideration of Gyorgy Kepes's the New Landscape in Art and Science, Journal of the Science of Design, 4(2), 2020）

モホイ＝ナジの教育哲学の背景には、プラグマティズムの教育者ジョン・デューイの経験主義芸術論、進化生物学者ジュリアン・ハクスリーの社会生物学の影響を受けていることが判明した。

ラスロー・モホイ＝ナジ著『ヴィジョン・イン・モーション』を訳出し、論文「モホイ＝ナジの教育活動と理論、日本への影響について」を執筆・出版した（国書刊行会、2019年）。さらに、ハンガリー移民芸術家であるモホイ＝ナジが、共産主義者として見なされたことが、市民権申請の際に弊害となっていたことも明らかとなった。

戦後、急速に必要とされたインダストリアル・デザイナーの社会的役割について、ハーバード大学を中心とする大学教育、デザイン研究所、産業界の間での認識の違いが存在することが判明した。

##### （２）ネイサン・ラーナーの未公開作品の評価

本研究の最大の成果は、従来一面的な評価に止まっていたネイサン・ラーナーの未公開作品がラーナー夫人の協力によって発見されたことにある。ラーナーの絵画、写真、デザインの作品分析を通じて明らかになったことは、彼がニュー・バウハウスの正統な継承者であるという点である。一方で、ラーナー夫人へのインタビューから、ユダヤ人であるラーナーに対する偏見が少なからず存在していたことも判明した。

研究成果を一般社会へ還元するためにネイサン・ラーナー展（2023年2月13日～3月13日、於：YOKOTA TOKYO）を企画し、論文を含むカタログ『Nathan Lerner 1913-1997』を日英

バイリンガルで出版した。この展覧会には、美術史家、写真評論家、デザイン史、そしてラーナー作品を所蔵する美術館学芸員が訪れ、意見交換の機会となった。日本人写真家石元泰博、金丸重嶺との交流について新知見が得られた。

(3) コロナ禍で研究計画を修正し、ドイツ人移民芸術家ウィル・バーチンについて米軍および政府の政策のために手がけたデザインを調査した結果、バーチンの仕事が冷戦期のアメリカのデザイン史において極めて重要であることが明らかとなった。特に冷戦期の科学技術政策と対外プロパガンダに関わるデザインは、冷戦期特有の政治と産業と芸術の複雑な関係のもとで発展した過程が明らかになりつつあり、この点については研究の継続が求められる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Toshino Iguchi	4. 巻 4 (2)
2. 論文標題 A Reconsideration of Gyorgy Kepes's the New Landscape in Art and Science	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the Science of Design	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11247/jsd.4.2_2_59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Toshino Iguchi
2. 発表標題 A Reconsideration of the New Landscape in Art and Science by Gyorgy Kepes
3. 学会等名 Asian Conference of Design History and Theory 2019 FUKUOKA（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ラースロー・モホイ＝ナジ、井口壽乃	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 388
3. 書名 ヴィジョン・イン・モーション	

1. 著者名 井口 壽乃	4. 発行年 2023年
2. 出版社 YOKOTA TOKYO	5. 総ページ数 59
3. 書名 Nathan Lerner 1913-1997	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------